口頭発表A①

学生討議型授業コンサルテーションの成果と課題
～学生の授業に対する取り組み方の変容に注目して～

吉田 博[1)]　金西計英[2)]
1）徳島大学教育改革推進センター　2）徳島大学大学開放実践センター

1. はじめに

我が国では、ミクロレベルのFDとして授業コンサルテーションの取り組みが始まっている。授業コンサルテーションとは、コンサルタントである高等教育開発者が、個別的、継続的に、クライアントである授業担当者に関与し、共同で授業に生起する問題の解決を目指す試みのことである[1)]。授業コンサルテーションの実践例としては、愛媛大学で実施しているMSF[2)]（Midterm Student Feedback）や、徳島大学が実施している、ビデオ記録を用いる[3)]タイプのものがある。また、帝京大学では、特別な教育を受けた学生が授業に入り、授業の進め方や教員の様子を記録し、受講生へのインタビューなどを行い、その結果を教員にフィードバックするSCOT[4)]（Students Consulting on Teaching）の事例も存在する。

このように、いくつかのタイプの授業コンサルテーションが行われているが、利用者が増えない、コンサルタントの負担が多い、コンサルタントの育成が難しいといった課題が存在している。授業コンサルテーションは、北米圏では最も有益な活動とされており[1)]、我が国でも、いくつかの実践の成果が報告[5-6)]されている。しかし、十分に研究が進んでいるとは言えない状況にあり、授業コンサルテーションの研究を進めることで、より実質的なFDとして活用できる可能性がある。

筆者らは2010年より「学生討議型授業コンサルテーションSDCC(Students' Discussion-based Class Consultation)」を実施している[7)]。SDCCの詳細は後述するが、特徴として、授業を受講している学生が、授業に関する議論を行うため、学生自身の授業に対する取り組み方を変化させる効果が見込める。授業コンサルテーションは、授業担当者に対する関与であるが、SDCCでは、授業における問題点が明らかになるだけでなく、学生にも変化を与えることで、授業全体の改善に繋げることを期待している。本研究は、これまでに実施したSDCCにおいて、SDCC実施前後における、学生の授業に対する取り組み方の変容を調査することで、SDCCの成果と課題を明らかにする。

2. 学生討議型授業コンサルテーション（SDCC）

ここでは、SDCCの手順のみを紹介する。詳細は（吉田・金西2014）を参照されたい。

SDCCは、コースの中間期に2回、グループワークを実施する（それぞれ約30分程度、1グループ4人程度）。グループワークの進行は、FD担当者が行う。1回目のグループワークでは、授業の良い点、及び改善点とその改善策についてグループ内で話し合い、B4用紙1枚程度にまとめる。これをFD担当者が持ち帰り、挙げられたデータを整理する。続いて、約1週間後に2回目のグループワークを実施する。ここでは、FD担当者がまとめたデータをクラス全体で確認しながら、どの程度の学生が同じ意見を持っているのか確認し、学生から具体的なコメントを聞くなどしてクラス全体での討議を行う。また、討議に加えて、授業改善に関するアンケートを実施する。これは、討議では明らかにされなかった少数の意見についても明らかにするためである。ここで、1回目のグループワークをアンケートに代えることも可能であり、グループワークを授業担当者が不在の週に実施することも可能である。

SDCCは、2段階に分けて意見を集めることで、挙げられた意見について、期間を空けて検討し、より妥当性を高める狙いがある。これらの結果をFD担当者と授業担当者で検討し、その対応を、授業担当者が学生にフィードバックする。

3. SDCCの実践・調査データ

筆者らは、これまでに5件のSDCCを実施した（表1）。それぞれの実践において、SDCC実施前後における学生の授業に対する取り組み方の変容を調査するためのアンケートを、①SDCCによるグループワークの直前（事前アンケート）と、②コース終了時（事後アンケート）に実施した。表1の学生数は、SDCCによるグループワークの参加者数を表しており、事前アンケートの回収数と等しい。事後アンケートでは、SDCCのグループワークに参加したか否かを問うており、参加した学生の回答のみを分析対象としている(表2)。

4. 学生の変容

事前、事後それぞれのアンケートの設問「この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習をよく行ったと思うか？（5件法）」では、すべての事例において、事後アンケートの回答でポイントの向上が見られた。次に、事後アンケートの設問「授業改善ワークショップ（SDCC）以降、あなたの授業に対する取り組み方に変化があったと思うか？（5件法）」では、すべての事例において、変化があったと回答した学生数の方が、変化がなかったと回答した学生数を上回った。その内容については、「授業中に集中して先生の話を聞くようになった」、「わからない所を積極的に質問するようになった」、「以前より予習をするようになった」などの回答が見られた。また、「コースの途中で、学生が授業の改善点について話し合う時間を取ることは有意義であったと思うか？（5件法）」という設問では、表3のような結果が得られた。詳細なデータは発表の際に示す。

表1　SDCCを実施した授業

No	実施日	教員	授業概要	学生数
1	2010年 12.21.	K教授	共通教育科目 全学部主に1,2年	85
2	2011年 11.29.	K教授	共通教育科目 全学部主に1,2年	90
3	2012年 11.27.	K教授	共通教育科目 全学部主に1,2年	54
4	2012年 12.5.	M教授	工学部専門科目 工学部(化学)3年	66
5	2013年 6.20.	H助教	医学部専門科目 医学部(保健)1年	34

表2　事後アンケートの分析対象数（人）

事例No	1	2	3	4	5
対象者数	93	97	47	57	34

※事例No1,2については、SDCC参加の有無を問うアンケート項目を設けていなかったため、回答者すべてを対象とした。

表3　SDCCが有意義であったと回答した学生の割合（%）

事例No	1	2	3	4	5
割合	84	78	75	41	71

※いずれも5件法のうち、「5.とてもそう思う」、「4.どちらかと言えばそう思う」と回答した学生の割合を合わせた数値である。

5. 考察

以上の結果から、SDCCは学生にとって概ね有意義であったことが伺える。その結果、学生の授業外学習への取り組みや、授業に対する積極性に影響を与えたと推察できる。また、事後アンケートにおいて「改善というよりも、先生の授業に対する考え方がよく分かり、何をすべきかが見えてきた」という記述があり、SDCCは教員と学生の相互理解を促す効果もあることが伺える。一方で、課題として、学生の変容とSDCCとの因果関係をより厳密に分析することや、授業実施者に対する効果の検証も必要となる。SDCCが新たな授業コンサルテーションの手法の1つとして位置づくためには、さらなる実践研究が必要である。

参考文献

1) 佐藤浩章ほか：授業コンサルテーションの現状と可能性，大学教育学会誌，33，2，50-53.2011.
2) 楢林建司・佐藤浩章：ワークショップ型授業の試みと授業コンサルティングサービス，大学教育実践ジャーナル，3，45-55，2005.
3) 香川順子ほか：徳島大学におけるFD実施組織としての役割と機能，京都大学高等教育研究，14，71-81，2008.
4) 土持ゲーリー法一：学生による授業コンサルティング，教育学術新聞，第2425号，2010.
5) 佐藤浩章：FDにおける臨床研究の必要性とその課題，名古屋高等教育研究，9，179-198，2009.
6) 安野舞子：学生参加型授業コンサルテーションの試行とその効果検証，横浜国立大学大学教育総合センター紀要，1，16-27，2011.
7) 吉田博・金西計英：コースの中間期に実施する学生討議型授業コンサルテーションの学生に与える影響，日本教育工学会論文誌，35，4採録決定，2014.